

のを必闍赤と云ひ、軍を司どるものを兀刺赤と云ひ、鷹隼を司どるものを昔寶赤といふが如きは皆之にして、かの *nomina agentis* といふもの即ちこれなり、されば站赤とは驛務を司どれるもの、或は驛傳によりて通過するものとの意なるべきに、『元史』に此の二語を以て「驛傳之譯名也」と説けるは思ふに之が轉訛に外ならざるべし、尙ほ此の語について考ふ可きは、蒙古語として之が史上に存するより以前、既に拓跋魏にも此の語を用ひ居りたることを知り得べきこと之なり。『南齊書魏虜傳』に拓跋魏の言語を録して「諸州乘驛人爲威眞」と記せり、威の古き音は「ハム」(ham)にして、之が「ヤム」、「ジャム」等と同一語なるべきことは音韻學上より證明し得べきことにも、今日滿洲語に存する驛なる語等と比較して斷定し得べきことなれば、既に北魏にても蒙古語「ジャム」(或は「ヤム」と同一系統にして、其の古き形に屬する語を驛の意に用ひ居たるものなることを知り得べし。而して威眞の眞字は即ち站赤の赤に相當すべき言葉なること論を俟たず、かくて蒙古人がその驛を稱して「ジャム」或は「ヤム」と云ひしより、彼等の領土擴張の大事業とともに、此の語は諸國に傳へられて、今日に至るも尙ほ彼此の地に此の言葉の存在せるを見る。即ち露西亞語に驛村を「ヤム」(yam)といひ、驛夫・馬丁を「ヤムチク」(yamčik)と云ひ、波斯語に驛舎を「ヤム」(yam)といふが如きは之なり。

如此站なる語は本來の支那語に非ず、されば元亡びて明興るや、站赤の稱は則ち廢せられて郵驛と稱し、清朝亦た此の名稱を襲ひて今日に至れり。站の語義既に此の如きを以て茲には主として元代の站に關することを記し、其の前後に及びては必ずしも詳述せず、別に設けられたる「驛傳」の題下に譲れり。